

目 次

日本女性学会ニュースレター100号記念	1	会員の著作	6
学会ニュース100号までの歩み	2	幹事会報告	7
NWECワークショップ報告	4	お知らせ ジェンダー史学会設立のお知らせ	7
スエック問題	4	第9回国際学際女性会議のお知らせ	8
独立行政法人国立女性教育会館の 統合等に関する要望書	5	お茶の水女子大学COEシンポジウム	8
バッシングについて	6	ホームページ検討のお願い	8
バックラッシュへの危惧	6	次回大会予告	8
		会員情報	(別紙)

Number 100 日本女性学会ニュースレター100号記念

Number 100 不可視化と分断に抗して

井上 輝子

バックラッシュの嵐が吹き荒れている。ジェンダーフリーバッシングは、憲法9条・24条改訂運動等と連動して、フェミニズムの研究と運動の成果を無にしかねない勢いだ。

バッシング派のへ理屈に辟易しつつ、ジェンダー問題の不可視化とフェミニストの分断が進行していることに、今注意を喚起したい。NWECの統合計画に象徴されるように、行政改革の流れの中で、各地で男女共同参画担当部署は、青少年担当や人権担当部局に統合され、女性センターは他の機関との同居を余儀なくされ始めている。公共図書館では、女性学・ジェンダー関係文献の購入を控えたり、見えにくい場所に配架移動したりする例も出始めている。バックラッシュ派による執拗な攻撃を受けて、「ジェンダー」や「ジェンダーフリー」の使用をめぐる、また研究と実践とのかかわりをめぐって、フェミニストたちの中に、分断と亀裂が生じかねない恐れがある。

女性学の研究と実践の拠点として、また女性学研究者たちのネットワーキングの場として、日本女性学会の果

たすべき役割は、きわめて重要性を増しているように思われる。

Number 100 日本女性学会NL100号に寄せて

河野貴代美

日本女性学会24年(1980年発足)の歴史のなかで、思い出深いのは、初回の設立総会のことである。場所は法政大学。記念講演は、元津田塾大のダグラス・ラミスさん。準備は不十分で、講演者に水ぐらい出したい、と思っても、幹事は幹事会の最中というしだい。

ラミスさんは、バーで女性が「ママさん」と呼ばれることなどを例に、わが国の男女関係を話されたと思う。小さい娘さんを連れてきた彼は、講演中、彼女がチョコチョコ会場を走りまわるのを、「しつけ、悪いねえ」と自ら苦笑していた。牧歌的というか、なんというか。

以降会員は増え、特筆すべきは会員の多くが大学にポストを得たことである。そのせいかどうか女性学(ジェンダー)研究所が大学に設置されるようになり、結果、研究は幅広く進化した。あるいは竹村和子さんの名づけるごとく「"ポスト"・フェミニズム」? だから、バック

ラッシュ勢力が「ジェンダーフリー」などを攻撃しても、それが核心ではないよ、という気持ちは強い。

教員が増えても、「よりよい制度化」を目指したとしても、日本女性学会がグラスルートの視座を失っているとは思わない。

100 自粛ムードにのせられないことを自戒して

國信 潤子

日本女性学会のニュースレター100号ですか。やっ、というべきか。ともあれ、刊行おめでとうございます。最近女性学ということばも消えつつあり、ジェンダーという言葉も地方自治体では使わない方が安全という状況になっています。さらに憲法改正のきな臭い動きもあり不安材料も多いようです。1930年代と同様という人もいるくらい。しかし、過去と違うところは日本国内の大学内等でしっかり女性学研究が根付いていること。次世代へのバトンタッチが、不十分とはいえ、あること。そして国際的ネットワークが国内の裁判などに影響を及ぼしていることです。国連などの機関との連携は以前は草の根までは届いていませんでした。世界と連帯して声を上げ続けること、自粛ムードにのせられないことを自戒しています。

100 日本女性学会への期待

内藤 和美

日本女性学会への期待—これまでの機能の延長上にあることばかりだが、大学院の女性学・ジェンダースタディーズ専攻、大学等の研究所と並んで、高質の研究の創出・協働拠点であること、社会的主張を通じて世論形成に与すること、学界に影響を与えること、運動・政策等種々の実践と協働すること、相互の建設的な指摘・批判も自浄作用も機能して形骸化・硬直化に堕さない組織で

あること、そして、あらゆる学問領域への女性学・ジェンダースタディーズ視点の導入とそれら関連科目のプログラム化、副専攻化の追求はもとより、専攻学科の創設の可能性追求を含め、大学の女性学・ジェンダースタディーズ教育の発展にこれまでに増して重要な役割を果たしていくこと等だ（大学の女性学・ジェンダースタディーズ教育に関して、私は、専攻学科の創設にこだわりをもつ少数派(?)の1人である。知のゲッター化への危惧は十分共有しつつなお、知の体系的集積と専門家の育成という点で、ある学問が固有の学部学科をもたないことのデメリットは大きいと思えてならない。

100 在野でフェミニストしたい

右衛門佐 美佐子

私が女性学会に入ったきっかけは、個人的な辛い経験を、今までにない知のパラダイムで捉え直し、同性の経験などを共有して自分自身の「何故?」という問いに答えを出したかったこと。また社会の仕組みが、女性にとっていい方向に向かうお手伝いをしたかったことである。

幹事をしている時、いち早く「従軍慰安婦」の問題や「女子学生の就職差別」の問題を取り上げた記憶している。そのうち、ふと女性学会の大会に足を運ぶ人種が、研究職、教師、大学の先生などが多く、圧倒的に偏っていると感じるようになってきた。私はデザインの仕事をしている。学究的な活動も大切であるが、私はもっと一般的な仕事やNPO活動の中で、フェミニストの視点を活かしたいと考えるようになってきた。又、女性が置かれている面のマイナス面を糾弾するばかりではなく、学んだ知恵でもっと創造的に運営したり、仕事のアイデアを出したり、そんなことを望んでいる。最近環境の国際プロジェクトなどで、それが少しずつできる状態になってきたのは嬉しい。

Number 100 学会ニュース100号までの歩み

日本女性学会のニュースレターは、今号でちょうど100号となります。そこで記念企画の一つとして、バックナンバーから毎年の大会テーマと開催地を拾い出してみました。1980年2月に第1号を発行して以来、現在までの過程からは、日本の女性学がそのときどきに直面し

ていた課題や問題意識が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

なお、バックナンバーの調査にあたっては、内藤和美さんのご協力を得ました。貴重な資料をご提供いただき、感謝いたします。

- 1980年 5月 「女性学の出発」法政大学
- 1981年 6月 講演・ダグラス・ラミス「日本文化と女性」
法政大学
- 1982年 6月 講演・水田宗子「女が自分を語る時：宮本百合子とボーボワールの自伝小説を中心に」神戸女学院大学
- 1983年 6月 「フェミニズムと学問」国立婦人教育会館
- 1984年 6月 「女性と宗教」早稲田大学
- 1985年 6月 「いわゆる“性差”と女性解放：近代社会にどうだまされてきたか」
名古屋勤労婦人センター
- 1986年 6月 「日本の文化的土壌とフェミニズム：フェミニズムを阻むものは何か」
国立婦人教育会館
- 11月 「日本の土壌とフェミニズム：女のく不払い」労働を考える」
京都市社会教育総合センター
- 1987年 6月 「日本の文化的土壌とフェミニズム：女のセクシュアリティ（生と性）」法政大学
- 11月 「日本の文化的土壌とフェミニズム：今、女性学を見直す」
京都市看護短期大学
- 1988年 6月 「日本の文化的土壌とフェミニズム：視覚イメージの政治学」国立婦人教育会館
- 11月 「日本の文化的土壌とフェミニズム：フェミニズムの原点に立ち戻る」
大阪女子大学
- 1989年 6月 10周年記念対談「フェミニズムをどう生きるか：駒尺・藤枝、大いに語る」
法政大学
- 12月 「女性の人権と性差別」京都精華大学
- 1990年 6月 「生殖の政治学」横浜女性フォーラム
- 12月 「女性への暴力：その構造を問う」
国立婦人教育会館
- 1991年 6月 「均等法5年：女性は働きやすくなったか」
東京女子大学
- 11月 「従軍慰安婦・キーセン観光・在日韓国朝鮮人女性：アジア女性会議へ向けて」
京都市国際交流会館
- 1992年 6月 「アジアの女性学を創る」早稲田大学
- 11月 「フェミニズムと表現の自由」
京都精華大学
- 1993年 6月 「夫から妻への暴力：婚姻関係の内外で」
せたがや女性センター
- 11月 「女子学生はなぜ就職できないか？ 就職差別の現状と構造」京都産業大学
- 1994年 6月 「フェミニズム文学批評に何が出来るか」
豊島区立男女平等推進センター
- 11月 「女性が問う“家族法”：戸籍・別姓・非婚」名古屋市女性会館
- 1995年 6月 「フェミニズムと国家：おんたと戦争責任」
国際基督教大学
- 11月 「多様なフェミニズムと私」
追手門学院大学
- 1996年 6月 「女と生殖：その欲求・技術・政治」
和光大学
- 11月 「フェミニズムと政策決定過程」
愛知淑徳大学
- 1997年 6月 「何のための女性学か：日本の女性学20年の「現在」を問う！」
かながわ女性センター
- 11月 「きしむ「家族」：制度と感情の乖離」
長岡短期大学
- 1998年 6月 「自己決定という「フィクション」：生・性・からだ」慶應義塾大学
- 11月 「専業主婦という「選択」：その是非または幸、不幸」
北九州市立女性センター・ムーブ
- 1999年 6月 「20世紀の女性表現を考える」
城西国際大学
- 11月 「働きたい、働けない：派遣・パート労働とリストラのいま」
大阪府立ドーンセンター
- 2000年 6月 「フェミニズムと政治権力」
東京大学
- 2001年 6月 「女性学の制度化をめぐる」
千葉市女性センター
- 2002年 6月 「ボルノグラフィーの言説をめぐる」
エル・パーク仙台
- 2003年 6月 「「男女共同参画社会」をめぐる論点と展望」十文字学園女子大学
- 2004年 6月 「ウーマンリブが拓いた地平」
鳥取県男女共同参画センター
- (荻野美穂)

＜NWE Cワークショップの報告＞

8月27日～29日に埼玉県嵐山の国立女性教育会館において、「男女共同参画のための女性学・ジェンダー研究・交流フォーラム」が開催された。日本女性学会からも28日に、「ジェンダー研究のフロンティア：「不安なく異なっている社会」をめざして」（司会：田中かず子）というワークショップを企画し、館かおる、荻野美穂、金井淑子が報告を行った。

まず館が、「日本におけるジェンダー研究の拠点形成：お茶大 COE の取り組みから」と題して、日本の学界においてジェンダー研究の主流化がどのように進みつつあるか、お茶の水女子大学の COE「ジェンダー研究のフロンティア」が目指すもの、さらに現在のジェンダーフリー・パッシングの潮流に対抗していくために必要な、ジェンダー概念による知の組み替え（エンジェンダリング）をはじめとする研究の方向性について話した。

次に荻野が、「ジェンダーと身体や生物学的性差との関係をどう考えるか」として、フェミニズムが「性差実在論」に有効に反駁していくためには、セックス/ジェンダー（身体/文化）の二元論のもとで身体についての議論を棚上げにするのではなく、物質と言説とのたえまな

い相互作用を通じて生み出され、性差も含めてつねに変化していくものとして身体を概念化していく必要があることを述べた。

さらに金井は、「不安なく異なっている社会：ジェンダー概念から拓かれつつある新しい社会像」と題し、フェミニズムはそもそも近代社会において、なぜ「男と女は同じ」と主張しなければならなかったかを説明するとともに、二項対置的思惟を超えた、差異を認めることが差別につながらない社会の実現に向けての展望を語った。

参加者は約150名と盛会であった。だが地方自治体の現場で男女共同参画に取り組む立場からは、「理論的にはわかるが、ジェンダーフリー・パッシング派に一言でパッと切り返すにはどう言えば良いのか」といった、いわば即効性のある答えを求める声も聞かれ、強まりつつある逆風の中で、研究と現場での活動との結びつきをさらに効果的なものにしていくにはどうすれば良いのか、そのための工夫と努力が切実に求められていると感じた。

（文責 荻野美穂）

又エック問題、日本女性学会幹事会も、要望書を提出しました。

新聞等でご存知のことと思いますが、学会としての対応について、少し経過を説明させていただきます。このかん、又エックの名で慣れ親しみ、日本女性学会も浅からぬ関係にあった国立女性教育会館が、行革推進中での独立行政法人の統廃合の流れを受け、独自施設としての存続が危ぶまれる状況にあるという問題が急浮上してきました。22法人を8法人に統合し、国立女性教育会館はオリンピック記念青少年総合センター、青年の家、少年自然の家と統合すると提案されたのです。またまた、「女・子ども」問題は一緒、の発想なのでしょうか。

この事態を受け、まず、独立行政法人国立女性教育会館の運営を考える会が、個人の連名で、9月27日に文部科学大臣、官房長官、総務大臣、行政改革担当大臣、「独立行政法人に関する有識者会議」「規制改革・民間開放推進会議」「総務省政策評価・独立行政法人評価委員会」「自民党行政改革推進本部メンバー」などに要望書を出したということです。

女性学・ジェンダー関連の国内の学会・研究会がどの

ような対応をすべきなのか、いろいろやり取りがありましたが、統一的な書面による要望ではなく、それぞれの学会・研究会の歴史や活動を踏まえて、それぞれの会の責任において要望書を提出することと、提出時期の目途を10月18日に予定されている「有識者会議」に向けてということで、上記の関係メンバーあてに要望書を提出することとなりました。

日本女性学会は、急を要する事態でもあり、大会も終えたばかりで会員全体の総意を確認する手立てがない中では、「13期幹事会」名で要望書を届けるのが一番現実的であろうということを幹事会内で確認し、以下の要望書を作成し、郵送で関係者に送付した次第です。

幹事会としては、今後も必要に応じて関係方に働きかけをしなければならない場面もあるかと考えておりますが、是非、皆様も事態の成り行きに関心をもって見守っていただくと共に、それぞれの場面からなしうる働きかけをお願いいたします。

（金井淑子）

平成16年10月15日

独立行政法人国立女性教育会館の統合等に関する要望書

日本女性学会幹事会 代表幹事
金井 淑子

私たち、日本女性学会は、1979年、日本の「女性学研究」を推進することを目的に、さまざまな学問研究分野からの研究者をネットワークすることによってスタートした研究者グループです。発足後は、会員は研究者にとどまらず学校教育・社会教育の現場さらに地域で学習を深めたりリーダー的存在まで広がりを持ち、現在、会員730名を擁する学会に発展し、日本学術会議の登録団体にもなっています。日本には、女性学研究の目的をもつ研究者ネットワークは、日本女性学会のほかにも日本女性学研究会、女性学研究会、国際女性学会がありますが、1978年にオープンした国立婦人教育会館（現・独立行政法人・国立女性教育会館）の存在は、これらの4研究団体を始めとする国内の研究者の情報交流とネットワークの場として大きな役割を果たしてきたことはいまでもありません。

とくに会館が80年代以降実施してきた「高等教育機関における女性学開設状況」調査が、日本の女性学教育推進と女性学研究の裾野の拡大に果たした意味は少なくないと考えております。同会館がまさに国内外の女性学教育のナショナルセンターとして4半世紀にわたり展開してきた研修・交流・調査研究・情報などさまざまな事業が、日本の女性のエンパワーメント教育に果たした意味ははかりしれません。私ども日本女性学会のメンバーは、同会館の主宰する講座や国外からゲスト講師を迎えてのシンポジウムの開催において、講師、助言役などの任を果たしたことも多々あり、その意味で、会館と共に日本の女性学推進の一翼を担ってきたという自負を抱いてもおります。

日本社会も男女共同参画社会基本法の制定を経て、21世紀の日本社会の福祉や教育など、新しい社会システムへの構造的転換を模索する取り組みが問われている中で、さらにまた国際化・グローバル化する世界における日本社会の女性の役割がこれまで以上に問われている中で、国立女性教育会館の女性のエ

ンパワーメント教育のナショナルセンターとしての比重もまたこれまで以上に大きくなっていると考えております。

さて、そのような中であって、今回、各方面で行われている独立行政法人の組織、事務の見直しに関連して、国立女性教育会館を国立オリンピック記念青少年総合センターなどの青少年教育関連法人と統合する案が検討されていることを知り、たいへん驚きかつ憂慮しております。昨今の日本社会の、行財政改革・構造改革の流れの中では、独立行政法人の組織、事務の見直しが避けがたいことと承知しておりますが、それでも、国の女性教育推進のナショナルセンターとしての国立女性教育会館の存在が見えなくなるような方向での統合計画案には、どうしても納得しがたい思いを強めております。

なによりも、日本社会が、国際女性年およびそれに続く国連女性年の10年とその国内行動計画を受けて基本法まで到達した女性政策の成果を国際的な場面にアピールし、「平和と平等」実現に向けた国際社会の取り組みに日本の女性たちが参画していく、その活動と情報の国際社会からの受発信のナショナルセンターとしての同会館の存在が見えなくなることは、日本の女性政策の後退の印象を各国に与えかねないのではないかとこの危惧を抱いております。

男女共同参画社会の実現に向けて、むしろこれからこそ、女性のエンパワーメント教育の意味が新たに問われているのだと考え、日本女性学会も女性学推進の観点からこの流れに寄与したいと考えております。そのためにも国内外の女性学研究者の交流と情報の受発信、ネットワークの拠点となる国立女性教育会館がいま以上に必要であり、本来の目的を明確にした単独法人として、今後も政府責任のもと存続することを強く願い、さらなる発展を期待するものです。

以上、ご賢察のうえ、ご高配くださいますようお願い申し上げます。

■ジェンダーフリー・バッシングについての私の個人的なスタンス

伊田 広行（大阪経済大学教員）

ジェンダーフリー・バッシングについて、紙幅がないので、結論のポイントだけを書く。まず、バッシング勢力からの無理解、誤解、意図的な矮小化、さらには歪曲やウソなどがあるのはご承知のとおりである。どんな運動や主張にも不完全なものや単純化しすぎたものが混ざることには避けられない。そこもバッシング派から突かれている。そのとき、どう対処するかで、意見は分かれる。

私の個人的な考え方は、他者の「ジェンダーフリー」の理解や定義の上に、それを擁護しようとするのではなく、「私はこのように使っています」と自分（たち）独自の定義や理解を示して、むしろ積極的にこの概念の有効性を訴えていけばいいということである。「ジェンダーフリー」を使わずに「男女平等」や「ジェンダー」を使えばいい、相手にしなければいいという自粛スタンスは、そのうち、「ジェンダー」も「男女平等」も「リプロ」も「性教育」も言葉狩りされるというように、とめどなく後退を余儀なくされるであろう。私がどんな服を着るかを指図されたくないように、私の言葉（概念）使いをどうして他者から指図される必要があるか。過去の理論的蓄積を、どうして単純な意見によって押し流される必要があるか。

具体的には、あなたはどの本を読んで「ジェンダー（フリー）」をそのように理解しているのかと問い、私はこの本、この論者の主張に基づいているとあって、自分の自信のある土俵に議論をもっていくことであろう。

次にそれに対しては、教育や公的な場所においては、そのような偏向した個人的な意見をいう権利はなく、正しいことが教えられるべきであるという反論がくるだろう。では、「正しい」「偏向」とは何か。教育の中立性・客観性とは何か。そのような、昔からの議論を、再度自分なりに消化して説明できることが必要であろう。社会科学の素養を少しでもつめば、ある近代的な概念の相対化の姿勢と、その上での各人の思想の自由を譲ることはできない。そこを保障せずに、何がしかの「正しさ」の押し付けという幼稚なスタイルをとるとするならば、それは学問自体の放棄になる。

その上で具体的には、男女平等、男女共同参画、人権尊重、差別（偏見）反対、家族尊重という「相手方も認める用語」を、自分のジェンダー理解、さらには、エンパワメント、多様性、暴力と非暴力、権力・支配、自己決定、家族単位とシングル単位、スピリチュアリティ、

性的少数派、セックスとセクシュアリティ、恋愛と結婚、結婚と離婚、アンペイドワーク、正常と異常、本質主義と社会構築主義、伝統と差別、区別と差別などの理解と結び付けて豊富に展開するのがいいと思う。私のこの主張のどこに、あなたは反対なのですかと自信を持って言っていけばいい。圧倒的な豊富さと深さによって、私（たち）の主張の真髓を伝えていくこと。その場があらゆるところに開かれているということである。私たち一人一人は常に、歴史の1ページ1ページを書く前に立たされている。戦前に戦争体制に迎合する人が増えていったときにも、それとは異なる選択をした人はいた。

なお、私のジェンダー（フリー）概念の理解は、拙著『初めて学ぶジェンダー論』（大月書店）に書いてある。バッシング派の方で反論のある方はそれを読んでから意見を言ってください。

■バックラッシュへの危惧

細谷 実

バックラッシュの言うところに耳を傾けてみると、「フェミの価値観をスタンダードとして行政力／政治力で皆に押し付けるな！」という主張があります。例えば「女の子／男の子の別なく育てる」や「父親／母親の別なく育てる」という価値観をです。

フェミからの言い分としては「これまでの男女の別が女性への加害や差別を生み出していた」とか「これまで、男女の別がスタンダードとして押し付けられていた」とかあるでしょう。

しかし、「ある価値観をスタンダードとして行政力／政治力で押し付けるな！」というのは、原則的には正当な話です。むしろ「基本的人権を尊重するような価値観」とかの例外もあります。しかし、フェミの主張の中のいずれが基本的人権に当たるがゆえに「行政力／政治力で皆に押し付ける」ことが許容されるかについては、コンセンサスができていないのが現状です。

バックラッシュで、前記の様な彼らの中にある正当な主張に便乗して、再び男女の別がスタンダードとして押し付けられることになることを、危惧します。

■会員の著作

- 『わたし』を生きる女たち—伝記で読むその生涯』
楠瀬佳子・三木草子編、瀬山紀子、寺崎あき子、和田明子
世界思想社 1800円＋税

■第13期幹事会報告

第1回幹事会 2004年6月13日

場所：鳥取県男女共同参画センター

- ・新幹事の役割分担、次回幹事会日程、今後の活動予定について話し合った。

第2回幹事会 2004年7月24日 2時～5時

場所：かながわ県民センター（横浜市）

出席：金井・荻野・館・釜野・河原崎・千田・小林・
内海崎・伊田・武田・北仲・佐藤・岩本
欠席：田中・楠瀬

以下のとおり、幹事の分担の確認を行った。

代表幹事：金井淑子

庶務：田中かず子、釜野さおり

会計：北仲千里、佐藤文香

学術会議・科研：館かおる

学会誌：小林富久子、千田有紀、河原崎やす子

研究会：伊田広行、内海崎貴子

アカハラ・セクハラ：岩本美砂子、北仲千里

ホームページ：武田万里子

ニュースレター：楠瀬佳子、荻野美穂

報告事項

- ・6月大会の会計報告
- ・学会誌の進行状況
1月発行を目途に作業中。編集委員会と幹事会との連絡を密にすることを確認。
- ・ニュースレターの進行状況
- ・会員の動向
総会で規約を改正したため、大会前と後の入会者の扱いが異なる。

- ・NWECワークショップへの参加
(本号の報告記事を参照)

協議事項

- 1 ホームページ
 - 1) 担当が会員の堀久美さんからエルナへ移行することにもなう諸問題について、移行が完了しておらず、契約内容についても不明な点があるので調べる。
 - 2) 更新や掲示板への情報アップをどのように行うか。
- 2 科研費申請講座
ニュースレターで参加を呼びかけ、申し込み方式にする。人数が少なければ、メールで処理する。
- 3 次年度大会の開催場所
フェリス女学院と交渉中だが、キリスト教の関係で日曜日開催が難しいようす。だめな場合も含め、引き続き検討する。
- 4 アカハラ・セクハラ倫理規定
大会での牟田報告を受けて、倫理規定を作るとすればその理由、問題点などについて種々議論した結果、次回までに岩本幹事がたたき台を作ることとする。
- 5 研究会
幹事会主催と会員主催のものがある。ニュースレターに案内を出し、趣旨に合うものには費用の援助を行っていく。バックラッシュ研究会は橋本・船橋・細谷が担当。
- 6 新入会員
入会を承認。
次回幹事会、9月19日開催を確認して散会。

お知らせ

◇ジェンダー史学会設立のお知らせ

本年12月、人類の歴史にかかわる諸学問領域をジェンダーの視点から深く研究するための学際的研究団体として、ジェンダー史学会が設立されます。趣意書には、「歴史・文学・言語・教育・宗教・思想・美術・音楽・演劇・経済・社会・民俗・政治・法・科学等々、多くの分野を含み、学際的双方方向性において、歴史におけるジェンダーの包括的研究を行うこと」、さらに「人種・民族、階級など他の諸要素とジェンダーとの諸関係を構造的に明らかにすること」が、目標としてかけられています。

以下のとおり、設立大会シンポジウムが開催されます。詳細については、下記にお問い合わせください。

12月4日(土) 中央大学駿河台記念館281号室

記念講演 13:00～13:40

アン・ウォルソール「ジェンダーの政治学」

シンポジウム 14:00～17:00

「今、なぜジェンダー史学か？」

大橋洋一、服藤早苗、前山加奈子、大森真紀、若桑みどり

問い合わせ先：中央大学経済学部 長野ひろ子研究室
F A X : 0426-74-3425
Email: genderhistory1@kh.biglobe.ne.jp
http://www7a.biglobe.ne.jp/~genderhistory/

会 場：お茶の水女子大学
(詳細は以下にお問い合わせください)

問い合わせ先：電話 03-5978-5547
FAX 03-5978-5548

URL: <http://www.igs.ocha.ac.jp/f-gens/>

Email: f-genszn@cc.ocha.ac.jp

◇第9回国際学際女性会議開催のお知らせ

第9回国際学際女性会議(WW05)が、2005年6月19日から24日まで、韓国ソウルの梨花女子大学で開催されます。会議全体のテーマは「地球を抱きしめる：東と西、北と南」で、その下に20の多彩なサブ・テーマが用意されています。

参加申し込みの締め切りは2004年12月31日です。

申し込み方法、そのほか詳細については、

www.ww05.org <<http://www.ww05.org>>

をご参照ください。

◇お茶の水女子大学21世紀COEプログラム

「ジェンダー研究のフロンティア」

主催シンポジウムのご案内

第1回F-GENSシンポジウム

「グローバル化、暴力、ジェンダー」

12月11日(土)

午前の部 基調講演

「ジェンダー法学と暴力の再解釈」 戒能民江

午後の部 分科会A

「いかにして権力はパフォーマンスするのか」

分科会B

「パネル調査に見る東アジアのジェンダー格差」

12月12日(日) シンポジウム

「再生産領域における〔複数の〕グローバル化と暴力：

アジアにおけるジェンダーの論題をめぐって」

◇ホームページ検討ワーキング・グループ からのお願い

幹事会内に、学会ホームページ(以下HP)の将来的なあり方を検討するワーキング・グループ(以下、WG)を設置しました。メンバーは、幹事の伊田広行、釜野さおり、佐藤文香、武田万里子で、今年度中に一定の結論をえることを目標とします。

現在、学会のHPは、会員向け情報媒体であるニュースレターに掲載された情報を基本に、年数回更新し、5万円程度の経費をかけています。具体的には、設立趣意、規約、入会案内、大会案内、学会誌宣伝、研究会案内、科研費講座案内、学会関与のイベント案内などを掲載し、学会の外部への宣伝機能を担っています。

しかし、情報化の進展のなかで、学会のHPは将来的にどのような機能をもつべきなのか、何のために、誰を対象に、どのような情報を掲載するのか、本格的な検討が必要と考えられます。英文版の必要性の検討も必要でしょう。どのような実施体制をとり、どの程度の経費をかければそれらを実現できるのかも、問題です。

「こんなHPにしたい」「こういう情報をのせよう」「こんな機能がほしい」という要望、「こうすれば実現できる」というお知恵を、もよりのWGメンバーもしくは幹事までお寄せください。(文責・武田万里子)

次回日本女性学会大会予告

時 期：2005年6月11日(土)、12日(日)

場 所：横浜国立大学(横浜市保土ヶ谷区常盤台)

テーマ：「フェミニズムと戦争」(仮題)

* 詳しくは次号ニュースレターでお知らせいたします。